

## 政治行政学科創立三十周年に際して

椎名慎太郎

### はじめに

政治行政学科創立二十周年記念号に、私は「政治行政学科設立の頃」と題して、学科設立の経過を概説する文章を書いた。今回、「三十周年記念」と伺って、時の流れの早さに驚くばかりである。二十周年記念号は、私が専任教員を退職した翌年に出ている。私自身は、その後、大学院法務研究科非常勤講師として2016年の学年末まで授業を担当していた。今回は、行政学科設立当初にお教えを受けた二人の先生の思い出を語ることでご勘弁をいただくことにしたい。学科が発足した頃の雰囲気が間接的に伝われば幸いである。

### 河中二講先生のこと

いうまでもなく、河中先生は創立当時の行政学科長であり、法学部長を兼務された。先生は、学科設置準備のために、1990年の4月に前任の成蹊大学から異動して来られた。1988年後半から動き始めた学科準備の活動で、古屋忠彦前学長と私は、同じ成蹊大学で河中先生と同じ行政学専門の佐藤あつし先生に最初にアプローチした。佐藤先生は、本学の行政学科構想に興味を示され、一旦はすぐに異動を承諾されたのだが、成蹊大学の内部事情

があるということで、代わりに河中先生を推薦された。

先生はすぐに異動を応諾され、成蹊大学の任期がまだ一年残っているにもかかわらず、学科開設一年前の1990年4月から本学に移籍され、法学部教授と法学部長を務められた。1991年に学科が発足すると、1995年まで二期四年にわたって学科長を務められた。

先生は新学科の設立に情熱をもたれ、未だ成蹊大学に籍がある1998年後半からあれこれとご協力いただいた。そして、先生は学科設立の先に、本学には未だ無かった大学院の設置を見通されていた。学科の教授人事構想にはそれが織り込まれていた。先生のご指示で実務をこなすだけの私に、そんなことは全く想像できていなかった。そして、学科が初の卒業生を出した1995年の新学期には、確かに大学院公共政策研究科が発足したのである。

先生は1923年生まれで、私とは二世帯近く離れていた。この年代の先生方にはなかなか難しい方がいた。河中先生にも、時にご機嫌を損じてお叱りを受けることがあった。そのほとんどの責任は、至らない私の方にあるのだが、気遣いが大変だったことは間違いがない。先生は1997年3月末にご退職された。新たに発足した大学院の研究科長には、河中先生を追うように成蹊大学から移籍された佐藤竺先生が就任された。

### 宮坂広作先生のこと

宮坂先生も、行政学科発足時に文部省に設置審査を受けた教授リストに名を連ねておられる。先生の狭義のご専門は社会教育・生涯教育を歴史的に分析することであったと記憶しているが、先生が実際に研究対象とされた分野は極めて広い範囲に及んでいる。先生が本学を退職される時に法学部の紀要である『法学論集』45号は、筆者が書いた拙い「猷辞」と併せて、

先生の1999年初頭までのご業績を年代順に一覧にしているが、これが6頁から61頁までに及ぶ長大なリストになっている。その内容の幅広さと共に、業績数の多さに驚かされた。

先生が東大教授退官後に本学に就任された経緯は、2011年8月に山梨学院生涯学習センターの『研究報告』第25輯に書いたことがある。その前年の秋に病没された先生を偲ぶ一文であった。それを参考に、先生が本学に赴任された頃のことを書いてみたい。

1990年の秋であったと思うが、先生が人事のことで古屋前学長に会いに来られた。その当時、学長を補佐して行政学科人事に関わっていた私は、それに関係する可能性が強いということで同席することになった。先生の来訪の主旨は、東大退官後に先生のご母堂が一人暮らしをしている諏訪市の山間のお宅から通える大学を探しているということだった。高名な先生が自らポストを求めて来学されたこと、そして、先生にご担当願える「教育行政学」が学科の内容を豊かにすることで、話はすぐに決まった。この席で宮坂先生は、生涯学習センターの構想を、熱意をもって語っておられた。

先生は1992年4月1日に本学教員の辞令を受けた。ところが、それから数日後に諏訪のご母堂は病気で亡くなってしまった。流石にこれは先生にとってショックであったようだが、その後は何事もなかったかのように、行政学科教授そして大学院公共政策研究科教授として教育に精励され、生涯学習センターの基礎作りに邁進された。

先生がご退任される一年前の1998年に、先生は私をセンターの二代目センター長に推薦された。法学部長を二期四年務めた後で、気疲れしないポストを与えられてほっとした記憶がある。先生はその後一年間、顧問として素人センター長を指導してくださった。

宮坂先生にも難しい一面があった。日頃はいたって謙虚でいらっしゃる

のだが、これという重要な決定について学科会議等の決めた方針に異議があると、それを曲げないので、会議が紛糾することが何回かあった。こうした時に裏の調整役である私がおの場をとりあえず治めて、宮坂先生にもいったんは矛を収めていただく。しばらくすると、先生の方から私に「よくお諫めくださいました」とご挨拶があつて収拾というのがよくあるパターンであった。

宮坂先生とは、ご退職後もあれこれとお付き合いがあつた。先生はご退職後もセンターの『研究報告』や紀要『大学改革と生涯学習』に寄稿してくださっていた。2011年8月に出た『研究報告』の第25輯には、センターが続けている「やまなし学研究」の2008年の講座でお話いただいた「甲・信二州の人間形成—校歌に見る理想的人物像の比較的考察」を起こした文章と、先生が病床で書かれたその「補遺」が掲載されている。これを書いた一か月後に先生は79歳で亡くなられた。この研究紀要第25輯には、筆者が書いた先生のご冥福を祈る文章を巻末に載せていただいた。